





# 論文博士の学位授与申請に係わる審査報告書

氏名（本籍）	張 玲（中国）
学位の種類	博士（学術）
報告番号	乙第 33 号
学位授与年月日	2020（令和2）年 5 月 8 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
論文題目	現代中国における女性像の変容 —ファッションと身体表象を通して
審査委員	主査 周 星  副査 唐 燕霞  副査 松岡 正子  副査 田村 和彦 

2020（令和2）年2月27日  
愛知大学大学院中国研究科

## 審査の結果の要旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、張玲より提出された論文博士の学位授与申請書および論文等関係資料により、2019年12月20日に、予備審査を行った。

張玲氏は1997年7月、中国の貴州大学歴史学部より卒業し、学士学位を取得した。2013年3月、名古屋大学環境学研究科で修士号を取得した。2013年4月、名古屋大学国際開発研究科の博士後期課程に進学し、2016年3月に中退した。2016年4月より、愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）の客員研究員として、ICCSの研究活動に積極的に参加し、若手研究会や国際シンポジウムなどで複数回の研究発表を重ねてきた。さらに現代中国の女性像に関するジェンダー研究の助成金も得て、その研究にも取り込んでいる。

張玲氏は日中間の翻訳書の出版のみならず、研究論文も多数発表した。今回の論文博士学位申請論文のテーマに関係している研究論文を四本発表し、そのうち、日本語論文が二本、中国語論文が二本、査読論文は三本で、査読なしは一本である。特に指摘されるべきなのが、査読付きの学術誌『非文字資料研究』第17号で発表された日本語の長編論文「ファッションから見る1980年代における現代中国女性の性・身体意識の変容」であり、方法論的に大量の画像・写真資料を駆使し、論説を展開した品質の良い研究と評価できる。張玲氏より提出された博士学位申請論文は以上、四つの研究論文を含む研究であり、またそれらの研究のさらなる展開と言える。

以上を踏まえて、愛知大学「大学院博士の学位授与に関する内規」第7条の定めにより、以下の2項目について、審査委員の意見交換を真剣に行った。

(1) 学位論文の予備審査及び履歴事項、研究歴、業績目録について、十分評価できる。

(2) 外国語の試問について、予備審査の段階では、試問の必要性はない。

予備審査の結果は、張玲論文は基本的要件を満たしており、学位授与申請の受理を可とし、本審査への移行を可とする。

2020年2月27日午前10時から、11時30分まで、審査委員会は張玲氏より提出された学位申請論文の本審査を行った。本審査は名古屋校舎M406教室で行い、同時に福岡大学と遠隔教学システムを使って、順調に実施された。

まず、張玲氏より、学位申請論文の主旨、問題意識、先行研究、理論の枠組みや方法論、キーワード、資料の信ぴょう性、論文の構成、本研究の貢献と問題点などについて、陳述がなされた。

次に、審査委員より、コメントや口頭試問・質疑応答を行った。審査委員の質問に対して、回答がなされた。口頭試問と質疑応答が終了し、張玲氏が退席した後、引き続き審査委員会は議論を重ね、以下の決議案をまとめるに至った。

張玲氏の学位請求論文『現代中国における女性像の変容—ファッションと身体表象を通して』は、中華人民共和国建国から現在までの、新聞・雑誌・インターネット等の活字資料及び写真、イラスト等の図像資料により記録された中国女性のファッションの変容を検討することを通じて、そのファッションと身体表象により視覚化された各時代の女性像の生成・変容の過程及びそのメカニズムを解明しようとしたものである。

本論文は1949年から現在までの歴史を、その消費の特徴を基準に、禁欲社会、消費

社会、情報社会の三段階に分けて、全七章で独自の持論を立てた。

第一章の序論では、本研究の目的と意義について述べ、服飾史およびファッション社会学における現代中国女性のファッションに関する研究、そして、現代中国の女性研究や女性の表象研究、ファッション・身体と女性の関係性に関する既存研究を概観し、整理した。

第二章では、1949年から1966年の文化大革命開始までの時期を禁欲社会の前半期と位置づけ、レーニン服の流行をメインに、この時期の新聞、雑誌の表紙に顕著に見られる女性の外見の変化に焦点を当て、なぜ建国以前に見られた女らしさが見られなくなり、代わりに飾り気のない労働者の姿が全面的に打ち出されたのかを考察した。

第三章では、1966年から1978年改革开放以前の時期を禁欲社会の後半期と位置づけ、軍服・軍便服の流行、旗袍の衰退や、女性の衣生活の変化、及び女性の模範として造形された「鉄の娘」に注目し、なぜ性的特徴を喪失した「中性」的な労働者女性像が提唱されたのかについて考察した。

第四章では、1978年から1980年代末までの時期を消費社会の前期と位置づけ、服装における色彩の増加やスカートの復活、そして次第に女性の身体美や官能性を強調する服装が堂々と登場するようになったことに焦点を当て、なぜ女性の身体表現が解禁されたのか、なぜセクシュアリティが一種の女性美として提唱されたのかを検討した。すなわち、「鉄の娘」から「性感女郎」への転換プロセスを明らかにした。

第五章では、1990年代を消費社会の成熟期と位置づけ、この中国社会の階層変動が最も激しい時代に、マスメディアがその時代の女性像をどのように提示したのかを検討した。ファッションを通して、女性自身が何を表現したのか、消費社会に突入したことで、消費は女性にとってどのような意味を持つようになったのか、また女性はどのように商品化され、消費されたのか。すなわち「消費する女性・消費される女性」の誕生の軌跡を考察した。

第六章では、21世紀に入ってから現在までの時期を情報社会と位置づけ、情報社会の進展が、ファッションの生産・消費、女性の社会参加にいかなる影響を与えたかを検討した。この時期に生じた顕著なファッションの動向、すなわち旗袍・漢服の復活、唐装の創出やコスプレの始まり、身体ファッション化の高まりに注目し、考察を行った。

最後に第七章にて、論文全体の分析を回顧した上で、得られた結論と今後の課題を呈示した。

本論文は現代中国女性のファッションと身体表象により視覚化された各時代の女性像を軸に、ファッション社会学、ジェンダー研究、生活史研究、メディア論等、広い範囲にわたる複数の視点から現代中国における女性像の変容、そのメカニズムを解明しようと試みた。

本論文の評価される箇所として、第一に、活字資料と図像資料を照合し検証した点が挙げられる。膨大な文献・図像資料を駆使し、2種類の資料を相互補完的に使用することにより、「女性像」そのものを明快に浮かび上がらせた。国家系の公式的な記録をメインにするのではなく、新聞雑誌のイラストなど図像資料を中心にしようと試みたことは、意欲的な取り組みであるといえ、高い評価が与えられる。

第二に、ファッションを定義し、注目することで、個人や単独の現象ではなく、「女性像」を集約的な現象としてとらえる視点を獲得している。ファッションを通してそれぞれその時代の「女性像」を解明する視点は重要かつ面白い試みであると評価できる。ファッションの歴史は女性の歴史と深く関連し、今でもファッションには、男女別の分類基準が流通している。ある意味では、ファッションは社会における男女の秩序構造の再生産にも寄与している。このようなことから、「女性像」に関する本論文の研究は、女性の生き様の変化は、時代と共に進化していくという進歩史観が主流となっている現代中国における女性研究に新風を吹きこみ、機械的進化論とは異なる女性問題を考え直す視点を提供した。また現代中国女性のファッションをジェンダーの視点で歴史の軸に沿って連続的に論じる研究が少ない現状の中、本論文は、一定の斬新性があると認められる。

第三に、中華人民共和国建国以降を中心としながらも、第6章の議論のように、近過去まで議論の射程を広げている点は、オリジナリティがあるといえる。

本論文はいくつか問題点もある。第一に、序論にはファッション社会学、ジェンダー研究、生活史研究、メディア論等、広い範囲にわたる複数の視点及び理論を取り上げたが、本文の分析、特に事象の考察においてこれらの理論が十分に活かされていないかった。どの理論がどのように用いられているのか、明確にする必要がある。

第二に、各章では、前半部分で各時期の社会状況について、先行研究を踏まえてまとめる形で丁寧に記述されているが、論のメインにあたる後半部分のその時期の服飾及び「女性像」までの議論においては、その厚さ、整合性がおいついていないところもある。

第三に、写真・イラスト等の図像資料を読み解くことから、結論付けまでの論証が短絡的で、単純すぎるところが見受けられる。また、先行研究や資料の不備も若干存在している。

以上を踏まえて、審査委員会においては、張玲論文には一部の問題点が認められるものの、論文全体として愛知大学大学院の博士学位論文諸規定に定められた諸要件を満たしているという結論に至った。

以上